

とある絵画の完成について

眩草

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雨降る中で神獣が戯れてみたお話。丁くんの生きていた時代のお話です。

別サイトの作品を推敲した後、投稿。

目次

とある絵画の完成について

1

とある絵画の完成について

さああつと音がして細やかな雨がたつぷり降ってきた。温かな雨だった。あたりは雨の匂いが濃く立ち上っていた。

幼い少年は、空を見上げもせず、とぼとぼと歩き続ける。手には、食料だろうか、穀物が入った小さな椀を持っていた。小さな村の道だから民家も周辺にあるのだが、見向きもしない。宿れる場所があればとうに宿っている。かがちにも似たその目が言っていた。

その姿を眺める目が9つあった。眼をいくつも持つ不思議な獣。真っ白い柔らかな毛並みは雨の中にもかかわらずふんわりと立つ。まるで絵画のようだと、少年を見つめていた。

少年はどこへ行くつもりだろうか。この先には民家もなく、あるのは唯、垂れ桜の大木だ。

絵画というには華が無いんだよねえ

神獣は、ふと、笑う。

「では、ちよつと戯れてみましょうか」

俯く少年の頭上を追い越して、向かうのは件の枝垂れ桜。降るのは春の雨だけれど、まだまだ桜の頃ではない。木は荒々しい幹を晒している。

幹の周りをふわりと舞って、枝先の固い蕾に息をかけた。何処か遠くの神様が、土の人形に命を吹き込んだように、息吹を吐いた。

途端に一陣の暖かな風。見ると蕾が柔らかに綻んでいる。

不思議なことに、「雨に打たれながら次々と桜の花がさいた。柔らかな花びらは幻想的な色合いを帯び、八重どころではなく十数枚の花びらをつける。

狂い咲き、その言葉こそ、この花々には相応しい。季節なんて無視して、木が元々持つ生命力の限りに花開かせたのだ。

もしかしたら、この木はこの春を最後に枯れてしまうかもしれない。それでもまあ、構わないのだけれど。

うつとりと景色を見ながら、頭の隅でそう思う。

「これで完成。名付けるならば、雨と桜と少年とって所かな？」

神獣が口を開く。若い男のような声 だった。

すつかり花が開ききつたころ、少年が 俯きながらやって来た。彼が目上げる ことなんて滅多にない。

普段誰かしらと目を合わせてしまえば、何を睨みつけているんだと殴られる。

しかし、今日ばかりは特別だ。何を思ったのか、顔を上げる。

途端、視界に飛び込んでくる淡い色彩。

少年の目は驚きのあまり思い切り見開かれた。薄い唇がぽかんと開き、感嘆の声さえ漏れる。

そのまま、樹の下へ導かれるように入っていった。狂い咲いた花はみっしりと枝々の間を埋めていて、雨も落ちてこない。首を捻りながらも少年はしばらくそこにいた。 暗い灰色の空の下、灯りが着いたよう な花影と、その下の少年。

満足のいく絵画が完成が出来た。

少年の知らない所で神獣がにやりと笑う。